

令和 2 年 5 月 25 日現在

機関番号：23803

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02216

研究課題名(和文) ポスト冷戦期における国際秩序観とロシアのユーラシア・アイデンティティ

研究課題名(英文) Russia's "Neo-Eurasianism" in the post Cold War Era

研究代表者

浜 由樹子 (Hama, Yukiko)

静岡県立大学・国際関係学部・准教授

研究者番号：10398729

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：国家の消滅、体制転換、冷戦の終焉という多重変動を短期間に経験した1990年代のロシアで、ロシアを(ヨーロッパの国家ではなく)ユーラシアの国家として位置付ける思想、「ユーラシア主義」が注目を集めた。本研究は、これが従来言われてきたようなロシア・ナショナリズムの要素だけではなく、90年代の激動を反映しつつ、行き過ぎた新自由主義への批判や、プラグマティックなアジア(特に中国)との関係強化を正統化する機能を負ってきたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

メディアや時事評論ではしばしば、欧米と一線を画すロシアを危険視する言説を目にする。その行動の背後にある思想や社会的背景を説明することなく、旧「西側」に同調しないロシアをただ非難する言説は冷戦期のマインド・セットをそのまま継承しているようにも思えるが、冷戦を知らない若い世代にも無批判に共有されていることを教育現場でも痛感する。「ユーラシアの国家」として欧米に従属することを拒み、新自由主義的経済原理や単一モデル的な「民主主義」を批判する思想がなぜ生まれ、支持を集めたかを理解することは、現代の国際政治における「遠い隣国」に対する理解を深める一助となる。

研究成果の概要(英文)：In newly born Russia in the 1990s, having gone through the regime change, the collapse of the Soviet Union and the end of the Cold War, an idea called "Neo-Eurasianism" got popular support. In searching for its new identity, it called for a new way for Russia to survive in the post Cold War era as a state of Eurasia. As many scholars pointed out, it was surely a form of Russian nationalism, however, this project discovered that it was also an idea to criticize the excessive neo-liberalism as well as to justify its closer relations with Asia.

研究分野：国際関係史

キーワード：ネオ・ユーラシア主義 ユーラシア主義 ロシア アイデンティティ

1. 研究開始当初の背景

2010 年前後から、冷戦終焉やその前後の時代を再検討する研究がめざましい成果を挙げてきた。冷戦を一つの「戦争」と捉えるならば、不透明さを増すポスト冷戦期の世界の在り方を考察する上で、冷戦の終わり方が「戦後」秩序に何をもたらしたかを検証することには少なからぬ意味がある。

その手がかりとなり得るテーマの一つが、往々にして冷戦の「敗者」と扱われるロシア(しかし、ロシア国内では冷戦は米ソの和解として終わったと理解されている)において、ポスト冷戦期の国際関係とそこにおける自己の立ち位置に関する、どのような思想・イデオロギーが生まれ、支持を得ているかを探ることであった。

ロシアにとって「ヨーロッパか、スラヴか(アジアか)」というアイデンティティをめぐる問題は、19 世紀以来の本源的な問題であった。冷戦終焉、体制転換、国家の崩壊という多重変動を経験した新生ロシアで、この同じ問いが再び浮上した。ロシア社会全体がアイデンティティを模索する過程で、かつて 1920 年代に、ロシア革命によってヨーロッパ各地に亡命を余儀なくされたロシア知識人の間で生まれたユーラシア主義(「ロシアはヨーロッパそのものではなく、ヨーロッパとアジアを架橋するユーラシアである」という思想)が再発見された。そして、この「古典的ユーラシア主義」への共感を基礎とした「ネオ・ユーラシア主義」が登場する。

先行研究ではしばしば、「ネオ・ユーラシア主義」はロシア・ナショナリズムの極端な一形態、反米思想の旗印のようなものとして理解されてきた。しかし、冷戦終焉期から続く国際関係の変動の中で、欧米の「勝者の価値観の普遍化」にいかに向き合うべきか、ロシアの存在意義とは何か、という切実な問いをめぐる議論の一部として位置付ける作業は、まだ途上であった。

2. 研究の目的

本研究課題は、まず、この「ネオ・ユーラシア主義」とはそもそもどのような思想であり、上記のような国際関係の変動をどのように反映し、ロシアの新たな在り方や行動をどう論じているのかを明らかにすることを目的とした。

先行研究は既に、「ネオ・ユーラシア主義」のイデオログとして知られるアレクサンドル・ドゥーギンについては相応の蓄積をしていた。しかし、思想のインパクト、学界からの敬意という点では、ファナティックな言動と派手な行動で注目を集めるドゥーギンよりも、アレクサンドル・パナーリンという思想家についての研究が深められるべきであると考えられた。

そこで、本研究課題では、「ネオ・ユーラシア主義」の全体像を把握するために必要不可欠なパナーリンに焦点を当て、彼の思想遍歴、時事評論を含めた論考に見られる国際関係観、ロシア社会論などから、彼の「ネオ・ユーラシア主義」思想を検証することとした。

3. 研究の方法

本研究は、基本的に地道な文献研究としてスタートした。古典的ユーラシア主義、ネオ・ユーラシア主義に関する思想史研究、現代政治との接点に関するロシア政治研究、ロシア外交研究、冷戦終焉論、アイデンティティの理論(コンストラクティヴィズム)を中心とする国際関係論など、広く目配りをしながら、一次史料、二次資料の収集を行い、読み込んできた。

同時に、本研究がターゲットとしたアレクサンドル・パナーリンには、生前に親交があった同僚、研究者となっているかつての教え子がいたため、彼らにインタビュー調査を行い、文献資料からだけでは知り得ないパナーリンの思想、人柄等について理解を深めることができた。

4. 研究成果

1980 年代後半のリベラルな政治・経済改革に失望し、「保守主義」に転向したと理解されるパナーリンの思想遍歴は、ロシア社会の変容そのものであるといえる。そして、1990 年代初頭の混迷の中で、欧米に従属するロシアに対して、欧米の模倣ではない在り方を提唱するが、そこには行き過ぎた市場経済中心主義、新自由主義に対する強い批判が通底していた。また、ロシアがこのまま欧米のジュニア・パートナーとなることを目指すのならば、いずれ民主化はバック・スライディングを起こすだろうという指摘は、今日では一種の「予言」めいた響きを持って受け止められる。

パナーリンの思想の個性の一つは、「民主主義」が本来擁護するはずの「多様性」についての議論であろう。欧米型の「民主主義」とは異なるかたちの「民主主義」がロシアにはあり、それを「民主的ではない」と非難することは矛盾であるという指摘は、後にメドベージェフ政権下で現れた「主権民主主義」論を想起させる。

ここまで検証を進める過程で、本研究は二つの新しい課題を得た。一つは、「ネオ・ユーラシア主義」と実際の外交理念の接点である。2015 年以降加速度的に進む「東方シフト」の中、一

見、古典的あるいはネオ・ユーラシア主義の思想に似通った理念が、ロシアの外交言説に目立つようになっていた。一部のジャーナリストや外交評論家は、ドゥーギンがプーチン政権の中枢に影響を与え、「操って」いるという「俗説」を提示してきたが、実際には、ミハイル・チタレンコらを中心とする中国研究者・外交官といった実務家集団こそが、両者の接点であった。本研究では、「ユーラシアの国家」としての近年のロシアの外交理念が、新旧ユーラシア主義から、多民族地域としてのロシアの個性と価値についての思想、欧米への「同化」批判を継承し、アジアとの関係強化（特に中国との対話）を正統化する機能を負っていることを、実務家たちの論説から明らかにした。

二つ目の課題は、「ネオ・ユーラシア主義」と地政学の関係である。古典的ユーラシア主義が戦間期の思想であったのと同様に、古典的地政学も戦間期に隆盛し、いずれも第二次世界大戦の終戦と共に消えていったが、両者ともに、1990年代のロシアで復活を遂げた。「ネオ・ユーラシア主義」の主唱者たちは、「地政学的」という言葉を多用する。このことにはどのような意味があるのか。本研究計画では、このテーマにまで踏み込む余裕はなかったため、これは同様の現象が観察されている中国やブラジルとの比較思想（史）研究として、新たなプロジェクトの立ち上げにつなげた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 浜 由樹子	4. 巻 189
2. 論文標題 ロシアの「ユーラシア・アイデンティティ」の形成と展開 外務省周辺の実務家・専門家グループを中心に	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 国際政治	6. 最初と最後の頁 114-129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 浜 由樹子	4. 巻 45-19
2. 論文標題 「ロシア=ユーラシア」という希望 ユーラシア主義者の見たロシア革命	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 213-223
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 浜 由樹子	4. 巻 30
2. 論文標題 米ソ映画にみる「文化冷戦」 立体的冷戦史理解と「和解」のための問題提起として	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 IICS Monograph Series（津田塾大学国際関係研究所）	6. 最初と最後の頁 1-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 浜由樹子・羽根次郎	4. 巻 No.81
2. 論文標題 地政学の（再）流行現象とロシアのネオ・ユーラシア主義	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Russian Research Center Working Paper（一橋大学経済研究所）	6. 最初と最後の頁 1 - 16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 浜 由樹子
2. 発表標題 「ユーラシア」の再概念化と地域秩序構想
3. 学会等名 広島平和研究所「人間の安全保障研究会」（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 浜 由樹子
2. 発表標題 地政学の（再）流行現象とネオ・ユーラシア主義
3. 学会等名 一橋大学経済研究所・京都大学経済研究所共催「新興市場の比較政治経済分析：中国・ロシア・東欧」東京ワークショップ
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yukiko Hama
2. 発表標題 Reconceptualising Spaces “in between” : Eurasia
3. 学会等名 The International Symposium-Between Asias: Inter-regional Spaces (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yukiko Hama
2. 発表標題 Justifying the "Eurasian Integration"
3. 学会等名 The 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 ロシア文化事典編集委員会（沼野充義・望月哲男・池田嘉郎・井上まどか・鴻野わか菜・金山浩司・熊野谷葉子・坂庭淳史・楯岡求美・乗松亨平）他約100名	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版株式会社	5. 総ページ数 886
3. 書名 ロシア文化事典	

1. 著者名 池田嘉郎他	4. 発行年 2017年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 320
3. 書名 ロシア革命とソ連の世紀 第1巻	

1. 著者名 池田嘉郎他編著	4. 発行年 2017年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 336
3. 書名 ロシア革命とソ連の世紀 第1巻	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考